

資料（３）福山市の基金

（2007 年 3 月 31 日現在）

（単位：円）

区 分	金 額
	億 万
福山市物品調達基金	1 3, 0 0 0, 0 0 0
誠之奨学金基金	1 0 4, 8 1 5, 2 3 4
村上カヨ記念基金	6 3, 0 0 0, 0 0 0
ライオンズ福祉基金	2 0, 0 0 0, 0 0 0
福山市財政調整基金	1 1, 0 7 4, 8 8 8, 7 8 7
福山市大橋財産区基金	7 3, 4 2 7, 5 4 4
福山市営競馬施設整備基金	7 1 0, 5 1 3, 9 1 2
福山市都市開発基金	5 9 3, 3 7 5, 3 2 8
福山市スポーツ施設整備基金	1 9 8, 8 3 9, 9 2 8
福山市減債基金 ※	2, 2 0 8, 4 9 5, 0 4 9
福山市生涯学習振興基金	1 8 9, 4 7 1, 9 2 8
福山市地域福祉基金	1, 7 7 8, 9 2 5, 4 8 2
福山市大規模事業基金	3, 5 0 4, 2 5 5, 3 0 7
福山市国民健康保険財政調整基金	2, 3 9 7, 7 2 1, 0 9 8
福山市営競馬財政調整基金	1 5, 2 4 3, 6 7 2
福山市ふるさと・水と土の保全基金	1 0, 6 9 1, 6 5 8
福山市介護給付費準備基金	4 7 0, 7 3 6, 4 6 3
福山市職員退職手当基金	5, 2 3 0, 6 1 9, 4 4 5
福山市地域振興基金	5 8 1, 1 5 3, 2 9 5
福山市協働のまちづくり基金	4 5 8, 8 8 8, 8 5 3
福山市集落排水事業基金	1 0, 0 7 1, 0 0 0
福山市鞆町歴史的町並み保存基金	2 0 0, 0 0 0, 0 0 0
合 計	

※（福山市減債基金条例第一条）市債の償還及び市債の適正な管理に必要な財源を確保し、将来にわたる市財政の健全な運営に資するため、福山市減債基金を設置する。

資料（４）鞆の浦の歴史

縄文～弥生 縄文土器、弥生土器が出土

奈良時代 730（天平 2）年、大伴旅人がむろの木を詠う。（『万葉集』）
おおとものたびと
吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき（第 3 巻446）
わぎも こ とこよ
（わがいとしい妻が往路に見た鞆の浦のむろの木は、長く命を保っているのに、見た妻は今はいない）
鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘らえめやも（第 3 巻447）
（これから、鞆の浦の磯にはえたむろの木を見るたびに、共に見た妻を忘れることはないだろう）
磯の上に根這ふむろの木見し人をいつらと問はば語り告げむか（第 3 巻448）
（磯のほとりに根を伸ばすむろの木よ。かつて見た人は今どこにいるのかと私が問うたら、お前は語り
教えてくれるだろうか）

728（神亀 5）年、大伴旅人は大宰府の長官に任ぜられ、都から瀬戸の海を下り鞆の浦を通して筑紫に着任する。その後を追ってまもなく妻の大伴郎女も大宰府にやって来て共に過ごす、数ヶ月後に妻が亡くなる。
730（天平 2）年 11 月には、旅人は大納言に任ぜられ、12 月に帰京の途についた。船で瀬戸内海を東に向かい、鞆の浦を過ぎるときに、三首の歌を詠む。妻を失った旅人は独り、かつて妻が筑紫に下るときに見たであろうこの鞆の浦のむろの木を見て、妻のことを思い出し、嘆き悲しむ。

736 年（天平 8）、遣新羅使がむろの木を詠う。（『万葉集』）
けんしらぎし
海人小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦廻に波立てり見ゆ（第 7 巻1182）
あまおふね うらみ
（漁師の小舟が帆を張っているのかと見えるほどに、鞆の入海に波の立っているのが見える）
さき ますらお うらみ
ま幸くてまた還り見む大夫の手に巻き持たる鞆の浦廻を（第 7 巻1183）
（命無事でまた帰って来て見よう。りっぱな男子が手に巻いて持っている鞆、その名の浦みを）
磯の上に立てるむろの木ねもころに何か深めて思ひ始めけむ（第 11 巻 2488）
（磯のほとりに立っているむろの木の根のようにねんごろに、いったいどうしてこんなに心深く思い始めたの
だろう）
はなれそ
離 磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも（第 15 巻3600）
（離れ島の磯に立っているむろの木は、まことに長い歳月を経てきたことだなあ）
しましくも一人あり得るものにあれや島のむろの木離れてあるらむ（第 15 巻3601）
（しばらくの間でも一人でいることがどうしてできるのだろうか。島のむろの木はなぜ離れ磯にいるのだろうか）
『万葉集』には鞆の浦の歌が八首残されている。

平安時代 927（延喜 7）年に編纂された『延喜式』に、沼名前神社が式内社として記録される。
ぬ か
源平合戦（1180～1185）の頃、奴可入道西寂や鞆六郎の名が知られる。『長門本平家物語』
には、鞆の浦で兵船を整えたとの記述がある。平安末期には鞆の浦が港としての機能を
有し、港町が形成されつつあった。

南北朝時代 足利尊氏が、九州下向途中の 1336（建武 3）年に、光厳上皇の院宣を受け取った場所と
して重要視される。『梅松論』によると、この院宣により尊氏は朝敵の汚名を返上でき、
ばいしょう
その氣勢は大いに上がったとある。そして、九州の大友氏泰にたいして、さっそく鎮西

に向けて出発することを申し送っている。後に尊氏は鞆の浦の金宝寺を備後安国寺と定める。また、尊氏は、九州全体を勢力下に治めると、京都に攻め上がる最後の軍議を鞆の浦で行い、海陸二手に分かれて進軍する決定を下す。鞆の浦は、戦いの重要な拠点となる。

室町時代 1349（貞和 5）年には、足利直冬^{ただふゆ}が中国探題として大可島城^{たいがしま}に入り、短期間であったが鞆の浦は中国地方 8 カ国の政治の中心となる。
毛利氏は、大内氏、尼子氏を倒し中国地方の覇者となり、鞆の浦を重要視し鞆城を築く。

鎌倉時代 後深草院^{ごふかくさいんのにじょう}二条が綴ったといわれる『とはずがたり』（1313・正和 2 年頃成立）に鞆の浦の大可島^{たいがしま}のことにふれ、「なにとなく、賑ははしきやどとみゆるに、たいがしまとて、はなれたる小島ある」とある。大可島はかつては鞆港を東側から囲む島だったが、関ヶ原の戦い後、安芸、備後に入国した福島正則が鞆城を再築した際（後述）に埋め立てられ陸続きとなる。

戦国時代 室町幕府最後の将軍、足利義昭^{よしあき}は織田信長に京都を追われ、1573（天正元）年に室町幕府は滅亡。毛利氏を頼った足利義昭は、1576（天正 4）年に鞆城に入る。「足利氏は鞆に興り、鞆に滅ぶ」とのゆえんはここにある。

1578（天正 7）年、尼子氏は毛利氏との戦いに敗れ、尼子氏に仕えた山中鹿介も囚われて護送中に殺害され、高槻市の観泉寺に胴墓が残されている。鹿助の首は鞆城に送られ、義昭の御前で首実験をし、静観寺の前に埋葬され、現在、“山中鹿介首塚”として残される。

江戸時代 福島正則が安芸・備後の領主として入部。正則は城山に支城として鞆城を最築。しかし、1615（元和元）年の一国一城令にさきがけて 1609（慶長 14）年に廃城となる。
福島氏は、「キリスト教を保護する諸侯の中で第一は福島」と言われ、鞆の津では布教活動が活発になり、1604（慶長 9）年には教会も立てられる。『1616 年イエズス会年報』には、「異境の親族たちは、キリシタンたちと、ろうそく^{たいまつ}、松明^{ちようちん}、提燈をもって、夜景に壮観をそえて葬式を盛大にした」と伝える。水野時代には鎖国令が敷かれ布教活動は絶えた。

1619（元和 5）年、福島氏が改易になった後、譜代大名の水野勝成が大和郡山から備後に転封し、まず神辺城に入り福山城の完成を待つが、鞆も重要な拠点とする。2 代勝俊は藩主となるまで鞆城跡の屋敷に居住していた。

1639（寛永 16）年に勝俊が家督^{おぎのしんうえもん}を継いだ後、萩野新右衛門に屋敷と町中を預け支配させた。これが鞆奉行の最初といわれている。

1826 年（文政 9）、オランダ医師シーボルトは鞆の津に立ち寄り、『江戸参府紀行』に、「私は町はずれにある医王寺に行った。数百フィートの高いけわしい山に登った」と記す。

水野勝俊が鞆を離れてからは、しだいに港町の性格が強まり、鞆の津と呼ばれるようになる。1650（慶安 3）年の祇園宮鐘銘には、「古来商旅貿易之地也」と記される。1672（寛文

12) 年、河村瑞軒による西回り航路の整備以後は、北前船や九州船が鞆の津に寄港し、鞆商業は著しい発展をとげる。

鞆の津は海駅としても重要な位置をしめ、特に朝鮮通信使の寄港にともなう接待は、藩の総力をあげて行わる。計 12 回の来日のうち、1811 (文化 8) 年、対馬で引き返した使節を除くと、往き返りのすべてで鞆の津に寄港する。正使、副使、従事の三使の宿泊所には福禪寺が当てられる。1711 (正徳元) 年の従事李邦彦は、対潮楼からの眺めを絶賛し「日東第一形勝」の書を残す。

朝鮮通信使の船は 5 艘、500 人の船団にたいし、迎える側は対馬藩が 50 艘の船に 500 人が乗り先導役をつとめる。福山藩は、料理人や給仕人など 1 千人を動員し迎え、鞆港の船着場から対潮楼までの道筋には毛せん、むしろなどを敷き、むしろは 3500 枚が準備され、5 歩ごとに竿に大提灯 6 千張りをかけ、4 万本のロウソクが置かれ、「夜視ること昼のごとし」と言わる。

1617 (元和 3) 年の朝鮮通信使の日記には、「海峡をはさんで観音堂(福禪寺)と社堂(弁天島)があり、いずれも絶壁となっていて、松林が茂っている。…島々や浦々にはすぐれた景勝地もあるが、ここが最も明秀奇絶だ」と書き残している。

参勤交代の西国大名、オランダ商館長、琉球使節なども鞆の津に来航し、活気ある町の様子などを日記に残す。

十返舎一九[1765 (明和 2) 年- 1831 (天保 2) 年]は『東海道中膝栗毛』続編の鞆津編のなかに和歌を書き残す。

青 昼敷きたるやふな備後沖居ながらおがむ神の恵みに

幕末

1863 (文久 3) 年、長州派・尊皇攘夷派が朝廷から放逐の (8 月 18 日の政変) 後、三条実美ら七卿は、京都を追われ長州に下る途中、鞆の津に立ち寄る。三条実美の乗る総督船につづき、二番船には三条西季知、壬生基修、四条隆謨、錦小路頼徳、三番船には東久世通禧、澤宣嘉、総勢二十数艘、400 人余の大船団であった。『土方久元講話』には、「(8 月) 23 日、夜の戌の刻(午後 8 時頃) 鞆津に投錨、下船し上陸。直さま出航するよう催促するが、折から風波穏やかならず、船頭ども容易に承知しない。血気の士はやにわに抜刀し船頭どもを脅した。…同夜半、強風をおして出航、翌 24 日午後、糸崎八幡浦に避難した」と記す。

七卿は、同年 9 月には澤宣嘉が但馬生野の変に加わり、翌年 4 月 25 日には錦小路頼徳が病死する。再び京都をめざす五卿は、1864 (元治元) 年 7 月 18 日午後 8 時頃、鞆の津にたどりつき、土佐屋で休息し、夜半には船にもどる。翌 19 日には保命酒屋(現在の太田家住宅)を訪れ、夜半に再び帰船する。翌 20 日にも保命酒屋で憩い、午後、多度津へと旅立つ。しかし、風待ちのため阿伏兎に投錨する。そして、翌 21 日に多度津へ入港。ここで蛤御門の悲報に接し、22 日早朝には再び鞆の津へ結集し、同日出船、翌 23 日には御手洗港へ到着する。

『竹葉集』(明治初期の歌集)には、幕末に保命酒を詠った七卿のうち 3 人の歌 4 首が載せられる。

亀山も何か求めむこの屋戸のこの酒こそは生く葉なれ

李知

世にならず鞆の湊 ^{みなと} の竹の葉をかくて嘗 ^な むるもめずらしの世や	実美
音にたつ鞆の港の浪まくらふたびかかるとも時世なりけり	李知
この家にかみしうま酒うま人のみまへに世ただもてはやしつ	通禧

坂本龍馬は、1867 年(慶応 3)4 月初旬に海援隊を組織し、伊予大洲藩から「いろは丸」を借用し、海運業にのりだす。4 月 19 日、長崎港を出航し、大坂へ向けて物資を輸送中、23 日岡山県六島沖で紀州藩の軍艦明光丸と衝突する(いろは丸沈没事件)。明光丸は鞆の津へ向けていろは丸を曳航^{えいこう}するが、宇治島付近でいろは丸は沈没。4 月 24 日に明光丸だけが鞆港に入港する。海援隊は榎屋清右衛門宅に宿泊し、明光丸側と 24 日から 27 日にかけて、対潮楼などで交渉を昼夜続行するも決裂し、明光丸は長崎へ出航、坂本龍馬側もその後を追う、交渉の場を長崎に移す。

4 月 27 日、龍馬は大坂の海援隊の菅野覚兵衛^{いず}に宛てて、「何れ血を見ずばなるまいと居し候。…我々共荷物も何も失いしものをただ鞆の港になげあげ…」と、明光丸が出航していったことへの怒りのたけを記している。

※いろは丸は、現在も海底 20m に船体を残し、沈没場所は、[1990 年](#) 2 月に[水中遺跡](#)に指定されている。

1987 年と 2005 年に調査が行われた。

(参考文献) 『鞆の浦の自然と歴史』(編集 福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会) 2002 年 4 月 30 日改定)

『万葉集』全訳注原文付(二)、(三) (中西進 編 新潮社 1981 年 12 月 15 日発行)